

94  
59  
1

桂園一枝  
卷

911.158  
388  
Vol.2

部	持歌
卷	46
年	3
日	彦根中學圖書館藏

不破榮次  
鄭氏齋贈

元啓記  
念文庫之印

雜歌上

朝

思事終学の先小至らぬ行としよき十之餘

題

火の多はしきて花もさわぐのとて夏アヒには

火の多はしきて花もさわぐのとて夏アヒには

火の多はしきて花もさわぐのとて夏アヒには

浦の水の音とあらはれの様子すらじ

磯浪

波濤の音がまたまかに聞こえ

題あは

玉の葉すれ道、明にあわは霞のねゆゆく

海邊眺望

うなづくや餘よどさんまくいふや紀佐野を山

古渡雲

それ水底すて津田川や野原の木そらやうるの

船

松浦よりや小舟大鷦のまむけ、まみまく森  
波の風ひばく、棹よはやくまくじる波あく

舟行夜已深

浦河あゆよけやうるじ棹音ゆくがまし

湖上舟

せよだ。朝あし舟をさしておのれのへ

男とくわみがままでりうゆ

あきらめ掉ふ池の傍らをかどるやまとくわまく

峯

大きの山の日影でむかひぬく風花の

池

あらうと名を守るむすびの花の

田

笛男のやまはまくさで竹のよしの道なり

市

わくのなみのうきはなをさむをさむをさむ

松

いわの木はむらわさりとまくまくらはの木

閑居

うらうとまみのむかへ山をよそもよそむかへ

閑居夢

むねのゆゑあるくすじ宿すまくまくかまく

やうの後をくわすかうへく観音寺へよ橋を  
見るをもはよ

すよとほんのじよが、市井に走りたる

### 山家

山窓くねくねくまの夜あらばせと寄り  
行きふゆうてはく今まわらわし

### 題

中へおまへとてまじゆうかくをまへ境

### 山家風

山窓くねくねくまの夜あらばせと寄り

### 山家冰

まくせとくらむとまくとくの井戻つて邊り

### 山家秋

山窓とまくけ身ひきぬきぬけ身せむ風露

### 山家鳥

わき飛ぶ年かの鳥れきの鳴きさくさく

山家人稀

朝やの端ねづれけらとよひあはれまく  
そぞくいもほがく松かへりしむすり

山家客来

佳れにとほくふすみゆきの松の下を寒そ明る  
物の香れた夜すのふとて

ゆくばひひきの里のやゑをもむかぢうち

古松

すゞしうるの姫松もとひすうのちす葉落わじ

松色映水

大孤いわゆび緑やほんじ深くアゆねのちる

人賀おれ添葉をらむ

葉えゆく君のう植ぐねまくみとほほ

對松年輪

子育いふみせぬもよ君の松は君をよしとすじ

三寶院の附別業、省耕亭、草堂十二景の和歌

おちよまでもひじりて彈琴邱ね  
はありまつてのうへ重衡の中將をへなむ  
參るや寂期のよきいづれを

かわといふはあれを

松風も冬もとむすせふれ緒ちやうゑと冬を

大野伊勢なる本居宣長都よりともほく

山松もよまとよあじてまこと

はよの根元よもじはさよかすきよ

もと播磨の別唐ぬま枕のねのよに

美代とまとうるまとれけねをもや思ひゆき

東六條の東駿が歩成園の十三勝の和琴

きてすてまよそのすてえ松鳴くこを

みのつゝあらはれどもせんねのよも

河原れのうれしのうをほく竹行始

千種樂園なる春日の行組の大神坐ま

てまよのうてくわう東鳴亭にまう

わのうへかくはるをむかひよせしめすとあるが如

鵠

類

とまつてや申る事に來るといふのね、夜も起る  
よしとひのあを遙かに見ゆるがせんとせんと見ゆる  
太へとあらわすお相手までおもひあらわす

卷之三

諸侯之卿大夫皆有封地，故曰侯伯子男也。

窓燈

卷之三

君の金をめぐらすまよが灯の下ゆふかくあわせ

雨中燈

まくまくはれ風雨すとひよしをあよなふわきよ  
題不知

焚のまよひと窓と墨すらひとゆく水明るき

旅行

草枕のゆきと雪と月と雲と人さす

旅曉

行進すなまくに秋と你とおもてと有りて有とくじ

旅朝

そよそよと風と雪と人さす(ゆく)と(ゆく)と(ゆく)と(ゆく)

旅宿松風

若う松の枝と葉と雪と人さす(ゆく)と(ゆく)と(ゆく)と(ゆく)

月前旅情

夜の旅や月と人さす(ゆく)と(ゆく)と(ゆく)と(ゆく)

しきてわくと(ゆく)と(ゆく)と(ゆく)と(ゆく)

度の下はよしらすにうなづけてハ、御色

之日，老少時醉上竹里亭，未盡其高才也。

そのうえまことに都を擰しては勢のあつて

見山純成、  
のうじゆんせい

けふくよりを

日清のもの東の床の上の景に風を引く外の星  
甲 駿河守昌敷のアラモ園(アマモイエ)のまわせ

ままで

お行法を長くやさせたり又あてもじきやあき  
師走のあはる越後國寺泊の圓雅法師  
都を下りて近づ國まへりて有て今  
年といひけりとす

田ノ山やうが是帰るを道でりとす  
池田基弘妻乃様舟とておもへむ

之れをか事ふとて嘸りまたとく

失念

君をもよおせ年ぬともとくもとく伊豫の松  
内と肩生秋原貞起わ、塾を出く信濃園へ  
らうともとひむかれてまじ事とのうち  
信濃の木立の向に置かれてやるわが身なり

述懐

かく身惣ひすまをせと故ひのちと風流より先づる

夜述懷

心事誰人知。寂寞自消磨。

獨述懷

はふてあは草木にれわいの思ひあらわ

懷舊

翁翁まことにすとよし今まやとせうめ

懷舊淚

至とをくよむ。年は経きむれども、歳がわすま

寄夢懷舊

わゆきはよじ山みの風ふるむ、記き度の山海りを

往事渺茫都似夢

思ひあは事もあらず、妄想をかねておぼえんれ

無常

物の廢びて、身の變りありきむか  
意の變りどりとも、いかば年はゆくすむ

寄風無常

けりして風のうと度たまへどりは風のうひを

寄風無常

けりふらうは雲のひの間あはれむかすり

題風無常

けりゆくとよしとてけりは風のうひをすり

崇徳天皇六百回御忌

松下宿、まほら、旅立ちかがりまで跡とる宿

八條相國六百辛曲竹にさふとせぬに秋夢

もふと、行きて、うもよもやありある

きりは者いひが、まづはひそむに秋雲

五月二日びやまん新嘗嘉門院御とくま

和歌くわい、ううう、詠まれてもかく

冬、かきかづく風うみかねじつけがりかく

拙巻せし人おまくちとむすまづりく

身みてまほせまづ便りのすえされ

登とてよみか

よやきにえやもとをのせうとおとせうじ

小海蘆巻身まへすけつてうる

新川がはりまくまわきとひ志代田ひく哉

ウタ風いふるや行は武者小路左中將か君

トキ牛としゆうとうとくとく

カムカムじゆまゆらせ、くわくわくわくわく

津み

うくとくと君ありぬけりれども、くほくとく

きゆまゆくさくさく

おじよそあうきをうねりぬよまひを、ほんとく

風比白木の花とくおきわづか

せやとうけんれひくまゆきとなはせやあ

誠拙せうし初月忌う哥うまくまく

手向げぬか

竹うさがちくほくせうて、くわくわくわくわく

或人の向くをうまぶたの里の哥えとは  
えむづくづくすまくはくへきほの  
うらが額よりあぢやくしりく  
ちどりやうとせき

も身ひまわるよしとくちのよし和くがれんがま  
曷敷う病せまつてほ加経に宣下うすす  
事ば甚みうみのち嘉之をもよす、とく  
まよふとよよく

アキトヲ教うるに往かねまくく、おの  
大路ますもよすみ子

あひゆいわゆれを金はく掠り観のひくく  
や何がれせよと泊の園カタ、貢乞ふ

ゑのうれのひわすりよしよしのうじ

狸スミに舞マツ齒

よく洞スルひよくゆき思ふよしよしよしよし  
ほく猿スミのすくはくすく

引ひきとあらまわすもじきくすりもあ

琵琶ほ

ねのうれむもねよく背をもとめゆき引つされ

わ。越後狮子

みづ流て雪原の原花よまでまかぬるあはれ

尉や姥のうら

相生流ねむく君付ひくませのうとうくゆ

久木白藏素人とけよつとてをすあ。

津んや今といふとじはるにわくへゆく秋更よま

末廣といひむ猿樂の面

まくらがまきだるを心置く事もあらむ空天の下

圓く鞆猿

やどりひわ木のまくらはれとがはのうのうのう

圓く千鳥

波音ちむらさくく時とて波音を飛冲浦浪

壁かの物ねいもる

行樂の事うどく富良野神カタマツノミコトをめぐらす  
若きときと流落鬼城アラシヤマノシロにて雪のやまと

ゆき圖

かき絵カキエぬまのうちもつゝもあらがひせりあをき

林野リョウノに女ドクの獨ドク様ヨウジヤウとよく姿シズのゆき圖

かき絵カキエぬまのうちもつゝもあらがひせりあをき

竹チクの葦アシのやくわ魔マハうも

あくまであらまつねう牛ウシのよなづまめすやま

蝶テフふひえよと圖

ものモノにあづねらアヅネラほしむかくムカクと葉ハらしき

安倍仲磨アメニシマサと明州アマガシの海邊シマヘンにて饗セシる

ふゆすと日ヒれそと清クモリとてうれしき唐カラにか

演主エンシ和風長壽樂カクまよ圖

八百日ハチヒ其後シテあわれ恨ハナレやハナレ舞マツうて、  
陵王リョウヲまよ圖

四方シラタケにさかづけシカツケとよめのくわくの時ヒメとおは

絕氏

おこづかのまくらがまくらのじゆくは

芳野川の岸上よりて歎き入浴する

新編著者考略卷之三

渡過內經子午庚之圖

西行上人猫の香爐にて

西行上人猫火香爐子

中之江の如きは、凡ての歌詞も當れど、煙草が主なる。

芭蕉翁

不知其誰也。故曰：「子雲之賦，漢賦之祖也。」

うやかの後蔭の春は秋は、この國

久々のやうな本音をもつて、どうぞおまかせ

常好んである。何より年々頗る其の如き

かまくらの雪より休ひの美術館へゆきあひゆふ

湯谷山記

あつてもひきあへるまじきうらやまひわざ

王昭君

四の絃はまほとがよくて滅をみみのうる

李夫人

やくに絃のまほとがよくてひせよひれりゆ

李夫人去漢皇情

りくゆふりくゆくすよひを立つてひそ

老菴子

子はすゑよひのとよかくすよひをわざね

韓信、市人の腹うなぎ同

かむかむ市人の腹うなぎのとよかくすよ

東方朔と元桃をうらやまう

玉代年ねしげんえびれもがむれどのとよかくすよ

開雲長

桃園のむすめのちよけいのとよかくすよ

主質

斧の柄とくつてつるあらゆるすよひとよかくすよ

席渙の三笑

多分に芳野の意へは附り難く、やうやく宣し

李白，醉後題

漢書三齊漢力汗門宣子許由飄然猶子

人宗元集

わくわくする心地よさが、やあやあするやうだ

王人漢氏。應和是文。ゆき。後

也。向陽明之學，

世界にあらわす(はるかなる)がまく書法(しょほう)を、

面壁の達磨

主事者少卿之子也。其弟有文才，人目之曰：

布袋の後し子の本

تَعْلِمُونَ

卷之三

宵行て入る朝をすまく御はとまへ首明

月桂指さへ

因ゆじまゆとゆゑく月乃都城より人やまれ

賓頭盧

方を浮かべ伊勢の山に仰む門はまわ

寒山拾得

あひよりやうひの草木の間は心がけの秋

丹霞佛像とやく

寺佛とまげおもむせうす筆入のまじめ

観音擬ともいふ

音もあらうふゆき、音もまてとくよすてれ幕、震

野寺僧帰

あふこ山櫻の空に立じは壁とくま葉深の袖

野寺隱喬木

中を空くらむし力ねぬ歌のふへやく

董頭有酒

かくもしよひあへりてまほん巻のノヨリのまほ

世も變へた

せうじの變へたのまほん

世も變へた

せうじの變へたのまほん

世も變へた

せうじの變へたのまほん

雜歌下

正月一日ねすみちをの文秋來アモテ草歌

なまくあらひのまほん

きづねはしひせばくせのまほん

つうてやけのまほん

じつにこ見めうまじ雪アモ降ふる行も

清園さくらの木の枝の木よ落ひくはえの聲

かく詩仙堂ばくの葉の戸推門序

初音子くまえとひくは豈る梅のあ

アモやかとくすまよみかづれ

梅のむらはといひあわせにいぢうきだら

をもくらひねば

あくねくまくらうくみだらむとさかなわまくら

登青院落印了敬うきよト奈若菜一龍を

なげきとあわせあこやじまなまほつ

アレ堵がふま人の昔よきまくまほづられ

そよとせくふわすかてまくまほづられ

とみけ力びうちよしゆゆくとも今もあくま

すとよみるきくすま

梅うめはくらむにあわせとひくわふらじ

ちんばく風

至とあかき歌とこをしりぬれとくと代内聲

三越弓

之れ井の水あくねせせを煙よめにまくらう

二月満月先へ後までまとめてやうやくお

御をめぐらすと金桶のままである

梅荷詣

いさき枝のちあとがひまつ花うるまくされ

淫樂會

世界はもろいよこひきて一粒つりやうござます

西行上人の新供・春月言志と云事

ほのせんねどもまかづらひもしるくわゆる

春釋教

まれやまはやくに晴ちの聲とも不さまやまくも

主人の追善地願・幻世春來夢

かれ國の毛矢やよて里じまいせとがれ萬葉

うき事にまゝの拂りよすけましゆめ考

自体う庭の花や盛まつていづの日、日次

まことに其處でふるまくとひねりてあら

まれがよみぐれ

ものゝあるはからず重りの事あつて是事の向

うか

わづくははれどもまじ渡り重きらるる君ノ事

世繼直貞の事と暮れにありてす日えどそ

よみてつづけられ

まやことのまよまよいねくともぬくまよし

宵さむがやけん年流十、熟えひくとる

藻渕院寄栗津の花、うて行つたは

まやくはまよまよくひくといまくお

まよまよまよまよいやじゆふよみくわ

まよまよまよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

馬の馬の馬の馬の馬の馬の馬の馬の馬の馬の馬

此のすゑ人間がまことに思ふもあらずて

今度は渠のよきに候もうのをよほども喜んで

六月のあやむうるおとせはまくら

たまきとあそび、虫蟲も秋わざとまくら

みれたらうねはよつてきなまくら

### 物秋薄

露打ふよせんとおとせはまくら

月の前は月まくら

よしとすとすとすとすとすとすとすとすとす

东はひたはいとひは西東とひ事

けふとまくらまくらまくらまくらまくらまくら

えらそひそひそひそひそひそひそひそひそひそ

弓を引まくらまくらまくらまくらまくらまくら

葉月かくらまくらまくらまくらまくらまくら

寛寧つかまくらまくらまくらまくらまくらまくら

まくらまくらまくらまくらまくらまくらまくら

すにやにひまむふうて

れとほりまはむよあく

こほ十六のれなみを頼裏三本木

水橋よひかくよよ

すし月あはれがまくあらゆゆ

空きやはとくわぬうをゆきとく

白いもに紫とくま

いまとあはれとくま

あまえはるわやまはま

三條の門わねまはすとく

しすの風の太枝不ま鴨一ひ

わゆれとくまくは

浦がねれとくまくは

題不知

かくらぬれとくまくは

十月の末君の四十九五戒のこま

をまやかす不飲酒戒の事は  
不吉の心地よがりて御心も御心

不偷盜戒

乞はうてはせぬが、わざとせにまで肉食をし  
一月棲りすとをも

庵へゆるはばとて、いつからせ布さを  
充じつやと

雪はもあすら、ある蘆葦うさへ事あ  
ほくにせりおれのねとけとゆて

身の身ははあしまてはげてはれとくわ  
うれの其病かくゆくはれきりとく

身はあらわ

あくび今まくわくわくわくわくわくじ

のとくわくわくわくわくわくわくわく  
もしてよまくわくわくわくわくわく

わくわくわくわくわくわくわくわくわく

青

ナツメウタカバノヨリシムヒトハシムの事うちを

黄

ヨリシムヒトハシムの事うちを

赤

ナツメウタカバノヨリシムヒトハシムの事うちを

白

ヨリシムヒトハシムの事うちを

黒

ヨリシムヒトハシムの事うちを

神祇

ナツメウタカバノヨリシムヒトハシムの事うちを

三輪

ヨリシムヒトハシムの事うちを

題もとめ

朴垣のえすよしのれ自居のじかながふるいゆき

寄神祝

さかうにそひゆく御すあねつア勤くるをあらま  
天てり座の御まみを御城やとむとおもひを

寄日祝

奉手向まく天照御坐不川世をひよの國あくねり

寄月祝

大君原吉代事清かくはせ方の序のまをひよく東

寄水祝

ねふすとみくらみづが坐處をたまのまよじて之

寄都祝

長界内急減すまばけりし子年みやう冬秋も、

萬世えのまくわくとすくわあくわうだえわく

寄松祝

移ふ道のえくねくまくわゑくまくわくじゆく

ちあくまはあくさまうかゑ、すくまゆらうをま

題一

隣奥の東山に見る松林の下に、天皇御代

寄竹祝

乞草をば植えみよかひくまわやひゆゑを哉

寄花祝

百敷うぢらひばねくし終局御代はす也

寄道祝

實えれり黒まで鹿く君代主兵主の道あれと實

難駄

長哥

江戸又あ里すよが春は四月からと原庭ある  
葵園よつてひく哥よしけり八月の後日ある

やうき、ひ、二月

春ぬよむれくゆうえ月雨よひよく門をつまみて  
むすめくよすめくよすめくよすめくよすめく  
ほぬよひよすめくよすめくよすめくよすめく

猪名乃里村の壽生尼より淡海の波つ  
ありて嘗つまうしてかくはなづる

時までたゞひり

朝ももも薄そく、いか干れ真砂よすらそ

川浦を吹のぶて、中津浪立むやうがつゝわ

拾ふ砂をとく人天比膳取入波の礫だつまく

立す、さくは流石やうへ籠りきし其漢と伊加

美崎いさむかく秋えだ貴の眞玉と綿は見方

海人はまくさゆ、舟はまくさゆ

ほつあ、十石車七車もくとせん先やは

糸子の後の赤壁乃あるひのよ

十月廿日は國内大雪のつゝ時くつて、月光

伏せ水はく、岩山あるも見ゆきよ三景も

きく駒巣のすゆふ新よこ季狩りよみ

やうりふとねりうれ浦を節を折る如

本枯の考歴すじと虚を解すかなるぬ焉能

のまく先やうり重ね、波静かすもく浦浪を  
うつ毛鷲色衣を整へる者故の今と見る

旋頭哥

五月の末れあやはしは國むかは伊丹の里よら  
そひて見病よがきてゆくほくわすもぐす  
駿河守まけづ都よりくわすくよく共  
あくらひやうそとまつらきくわすもぐす

さくへよめ食

もくまきまきゆる多時の一ひとてんづの極きわ  
ゆくよくやわく舞

太槿おおつきの花をえく

いよ垣いよがきの小松、中れ槿なかつきのむきをひくひた  
朝あさほまれ

大嘗會れよまきまち其夜よよぎのまき

それよみゆすれ

支君しづかひまえふよこくはくはくをひだり

月子照子

至り奉着婢（まごひき）のすゑ人のかへく  
萬乳根（まんにゆね）のあゆ（あゆ）てとくもが婢（まごひき）日（ひ）ちやもん  
始（はじ）今（いま）泥（なづ）坐（おき）けし

信濃國（しなのくに）ねむれ（ねむれ）小林為邦（こばやし ためい）比葉生  
れ（れ）ととて駒（こま）のす馬（ば）るじま  
の（の）をきつて白薺（しらなづ）と名付（なづけ）す欣（うき）と嬉（うき）  
す（す）かよふくさ（くさ）（あ

處（ところ）うち聲（こゑ）せ（せ）き（き）のもこれぞの音（おと）  
あか法（あかほ）の家（いえ）（あかほ）

俳諧哥

社頭（しゃとう）の春（はる）と（と）あく（あく）はよ（よ）

石上（いそじょう）の春（はる）と（と）あく（あく）はよ（よ）

へう去始（へうごし）家梅始開（いえうめはじあけ）と（と）よ（よ）

通（とお）すまわ春（はる）と豈（いか）清（きよ）すとすと梅（うめ）のと（と）も

御忌（ごき）のは東（ひがし）ば思（おも）ひやまで

吉水ノ大鐘の聲ひくれりよだまくもんづけられ

題一ふ

冰と雪と化すに車はつや纏をうすあらき  
さくすと絶えぬほんとせばもよける事のあれ  
あらうつてゆれと行ひて原とひそてが生れり  
やまとやなむ心地あら駄すまかわせしゆきちうと  
むみじとまくらひれりかの駄たゞはまくら寝  
茶を下せたまそ和よ廣く描くまく風のえづ  
紙扇をほほぬ月夜をうなぎてて流の空  
岸のまくら日本とせうて空をなまくまくか  
かきじゆういじめのまくらひくね代乃ち  
まくまくまくらゆきとゆきとゆきとゆきと  
節りてまくらゆきとゆきとゆきとゆきと  
まくまくまくらゆきとゆきとゆきとゆきと  
う縫をほほぬ此の衣がまくらゆきとゆきと  
たのゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

はよまくわゆ、是れ事のうへおもひて死に難ふる  
爲たむ程程むじきもの端ひがればすあらも  
蓮葉のうへてあらむ思ひ度すまよせうて坐ふ  
ひがりて駒ひともがたまのなまあひかやまう山  
山駕りうへてあらむ度の時うへ一此とじかに坐ふ  
國へとそぞくは難今ひをもひてうゑびる  
育むるあらむとけほへぬ處を心地ちき  
おこまうけられ失精の常(繁)めくらひあらむ  
すほくの都場へてうゑびる中をうきうきする  
多氣ひくねあはれの唐木のなまかとて野舟のうき  
坐すと縁とほくとく縫ふみうけの縫衣の色  
監房にゐるかのれ開けりむかせのひの聲  
ひのれむとひくとく縫うねむがるゆ方ひ敷  
ひ戸にあひとしゆる鳴たせむれあら  
あらうやつゆくとくがるを

وَمِنْهُمْ مَنْ يَرْجُو  
أَنْ يُنْهَا إِلَيْهِ الْمُنْهَى

まじきいへり草花早といふ事

草はうらわの葉をもつて木の下に生る

蘭の花と

あらぬとすれども近づくと淡色

題もん

山の木の葉とあそ葉の花むとひくおひを  
姫のほりあ葉いとせの匂ひてうらぎを吹  
きましとひく小聲のあそびく人よにうかきまわされ

けむねむねうしとまの音すゆきすまくか

れれぬきぬまのうかくはよかにけまを吹く

山の木の葉とあそ葉の花むとひくおひを吹

たまむねうしとまの音すゆきすまくか

れれぬきぬまのうかくはよかにけまを吹く

箱根の木の葉とあそ葉の花むとひくおひを

詠つてうらやましく思ひはなづかうれ  
周りのことをあそびのまゝ口うけの詩をうたふ

よみくらむに教わるまへうけすじよへはせ  
うきだつてあふてうけじゆくもとゆふ有の鉢れ

朝あわさくあとくうわがわがわの魚あらね  
冬かきはねうきの野いらでうもとせんかよあれ

一月櫻りうらう時雪

鴨行はまつてあまくねうきもとゆく年うする

題一歌

久保の隣(つぢのわき)はうち見(み)てあやあやか  
琴(こと)はぬ桶(おけ)の火桶(ひとう)を吹(ふいて)ねと来てはせだる  
侍(し)であゆく人(ひと)が年(としひ)をうけてとてにまほとみゆくし  
うきがいは數(うけい)とくとくや此(この)うきよもとゆくしやる  
思(おも)ひがいはうともとくわやなゆいあれをおとせまじ  
やくわうああうとくわやなゆいうしてすれら年(としひ)をう



越へて見ゆる事はあらまつて風也  
生風のものと對く見えぬ事とゆうぢりすらも  
いはれどもせよかとおもひてよしとへ思ひてす  
おもむてらしむる蓮葉が爲とよめんがもじ  
黒木うぶさ

久きやうやかに筆をやくせかる事まことに

題一

三歳の子がおまえ城をうちまへぬて何くあれ

アヤシキもあつてやうと懸けむけに海を

ゑびこうともあれば金をうなぐて屋敷を構へ

猫ねずみをうまたがうお向うを月昇る

人達しゆうと家をなまくらすとじよきのとくは

草をうて松戸のやうをあそびにむかひくらうと

わくとくは事あふかねまうほくとくをうかうとく

まよみよ鏡の面を新すきてそよや秋をうかうとく

ひやうてすくすく圓とぞうのあら木

あらのよきやふくすとせまつてゆるひてま  
けをきてほしておきゆめんもとどりてゆる  
てうかやくゆるなたといひゆるゆる  
ゆくよもやうじの隠れむらはせや

題不知

太陽河の歌ゆりよしも流よひぬ春の山  
まよれねるよひもせしまひすが冠ひや  
月日がよみてまづけひよる名すす有

津國船門うぶ獻求法師在世時鳥  
ばく悟道のとあやまつて今年うづ  
百回忌の追善よひゆふとお出である  
人哥ちりせきぬよして

船門の舟ぐいの鷺よひせすとくやまし

卷之三

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

百二十

十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

三十  
三十  
三十  
三十  
三十  
三十  
三十  
三十  
三十  
三十

